

■ 資料

日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト (2016)

坂 中 正 義

(南山大学人文学部心理人間学科)

要約

本論文は、2016年に発表された、わが国におけるパーソンセンタード・アプローチ関連の文献リストである。文献は、非指示的カウンセリング、来談者中心療法、パーソンセンタード・セラピー、パーソンセンタード・アプローチ、ベーシック・エンカウンター・グループ、フォーカシング、体験過程療法、フォーカシング指向心理療法、積極的傾聴法等に関するものである。収録は「来談者中心療法」「ベーシック・エンカウンター・グループ」「体験過程療法・フォーカシング」「その他」ごとに、A. 書籍、B. 研究論文、C. 学会発表、D. 翻訳、E. 海外文献紹介、F. 書評のジャンルに分けて行っている。

キーワード：来談者中心療法、パーソンセンタード・セラピー、パーソンセンタード・アプローチ、ベーシック・エンカウンター・グループ、フォーカシング、体験過程療法、フォーカシング指向心理療法、文献リスト

はじめに

筆者は、わが国におけるパーソンセンタード・アプローチの研究および実践を振り返り、今後の発展のための課題探索の1つの手がかりを提供するため、次のような文献リストを作成した。

1. 坂中正義 1998 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト ―ロジャース選書及び全集― 九州大学心理臨床研究, 17, 113-121.
2. 坂中正義 1998 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に

- 関する文献リスト（～1969） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 2, 9-31.
3. 坂中正義 1998 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（1970～1974） 福岡教育大学「教育実践研究」, 6, 81-88.
 4. 坂中正義 1998 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（1975～1979） 福岡教育大学「教育実践研究」, 6, 89-98.
 5. 坂中正義 1999 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（1980～1984） 福岡教育大学紀要（教職科編）, 48, 195-214.
 6. 坂中正義 1999 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（1985～1989） 福岡教育大学「教育実践研究」, 7, 115-132.
 7. 坂中正義 1999 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（1990～1994） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 3, 13-51.
 8. 坂中正義 2000 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（1995～1999） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 4, 13-55.
 9. 坂中正義 2001 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2000） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 5, 23-56.
 10. 坂中正義 2002 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2001）—第Ⅰ部：来談者中心療法— 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 6, 51-68.
 11. 坂中正義 2002 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2001）—第Ⅱ部：ベーシック・エンカウンター・グループ、第Ⅲ部：体験過程療法・フォーカシング、第Ⅳ部：その他— 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 6, 69-85.
 12. 坂中正義 2003 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2002） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 7, 1-22.
 13. 坂中正義 2004 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2003） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 8, 31-50.
 14. 坂中正義 2005 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2004） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 9, 17-36.
 15. 坂中正義 2006 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2005） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 10, 1-24.
 16. 坂中正義 2007 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2006） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 11, 1-20.
 17. 坂中正義 2008 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2007） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 12, 1-24.
 18. 坂中正義 2009 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2008） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 13, 9-29.
 19. 坂中正義 2010 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2009） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 14, 27-50.

20. 坂中正義 2011 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト (2010) 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 15, 29-50.
21. 坂中正義 2012 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト (2011) 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 16, 1-20.
22. 坂中正義 2013 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト (2012) 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 17, 1-23.
23. 坂中正義 2014 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト (2013) 南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」, 13, 231-255.
24. 坂中正義 2015 日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト (2014) 南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」, 14, 231-255.
25. 坂中正義 2016 日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト (2015) 南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」, 15, 105-134

本論文では、これらの論文の続編として、2016年の日本におけるパーソンセンタード・アプローチ関連の文献リストを作成する。また、これまでのリストに漏れていたものを追録する。

方法

2016年に発行されたパーソンセンタード・アプローチ関連の以下のようなキーワードが論じられている文献が収集された。

非指示的カウンセリング、来談者中心療法、パーソンセンタード・セラピー、パーソン・センタード・アプローチ、ベーシック・エンカウンター・グループ、フォーカシング、体験過程療法、フォーカシング指向心理療法、積極的傾聴法、人間中心の教育等。

分類方法は、文献を「来談者中心療法」「ベーシック・エンカウンター・グループ」「体験過程療法・フォーカシング」「その他」の4部に分類し、それぞれ、A.書籍、B.研究論文¹、C.学会発表、D.翻訳、E.海外文献紹介、F.書評に分けて収録した。さらに、各部ごとに2016年の動向や代表的な文献を紹介した。

文献は、できるだけ手広く収集を努めたが、不備も予想される。それらについては、指摘をまって、今後の文献リストシリーズの中で、訂正、追加、補足したい。

¹ 研究論文には便宜上、ニュースレター等も含めている。

第Ⅰ部：来談者中心療法

「第Ⅰ部：来談者中心療法」には関連文献のうち、来談者中心療法、来談者中心遊戯療法、パーソンセンタード・セラピーといった個人カウンセリングや「自己一致」「共感的理解」「無条件の積極的関心」「アクティブリスニング」などの基礎概念、歴史、人物等が論じられているものを収録した。

2016年の概要は次のとおりである。「A.書籍」はなかった。「B.研究論文」は16本で、そのうち1つが特集であった。「C.学会発表」は6本で、そのうち3つがシンポジウムであった。「D.翻訳」はなかった。「E.海外文献紹介」は2本であった。「F.書評」はなかった。

2016年の「来談者中心療法」の特徴は、この領域で議論となる問題や課題を論じたB-7、E-1、E-2が刊行されたことであろう。

B-7は、非指示概念について検討した論文である。近年、中核3条件をめぐる再検討は活性化してきたが、非指示概念についての検討はあまり触れられてこなかった。そこにある諸問題を整理しつつ、事例を通して検討した意欲的な論文といえる。

E-1、E-2は、昨年より中田行重氏によって推進されているこの領域の理論を検討する上で重要な問題提起や考察を提供している海外論文の紹介である。今後このような文献をコンスタントに発行されることを期待したい。

なお、2016年は「心理臨床学研究」に1本（B-1）関連文献が掲載されている。

A. 書籍

〔該当文献なし〕

B. 研究論文

1. 藤木由理 2016 井上淑子さんを囲んでの小グループでの学び カウンセリング, 48(1), 26-27.
2. 尹 成秀 2016 先人に訊ねる日本の心理臨床学史 田畑 治先生に訊く 心理臨床の広場, 8(2), 28.
3. 池谷信子 2016 私のカウンセリングの道 カウンセリング, 48(1), 13-17.
4. 井上淑子 2016 カール・ロジャーズに学んで—私のカウンセリング— カウンセリング, 48(1), 22-25.
5. 石井要子 2016 理事長挨拶 カウンセリング, 48(1), 1-3.
6. 菅 吉基 2016 中学生不登校生徒の教室完全復帰の事例—クライアント中心療法からの考察—愛知学院大学「心理臨床研究」, 17, 53-66.
7. 金子周平 2016 我が道の歩き方がわからない成人女性との面接を通した非指示概念の再検討 心理臨床学研究, 34(4), 435-445.
8. 加藤敬介 2016 リカバリーの概念とパーソン・センタード・アプローチの親和性 日本人間性心理学会第35回大会 プログラム・発表論文集, 38-39.

9. 加藤敬介 2016 リカバリー概念とパーソンセンタード・アプローチの親和性 日本人間性心理学会ニュースレター, 87, 3.
10. 河野貴和子 2016 ある双極性障害者の心理療法過程に関する一考察—クライアントの情動に焦点をあてながら— 愛知学院大学「心理臨床研究」, 17, 67-77.
11. 川手泰子 2016 永田富美子さんのグループの司会をして カウンセリング, 48(1), 30-31.
12. 吉良安之 2016 クライアントとともに過ごす場から学ぶ 人間性心理学研究, 33(2), 179-184.
13. 永田富美子 2016 カール・ロジャーズに学んで—私自身のカウンセリング— カウンセリング, 48(1), 27-30.
14. 中村忠生 2016 龍門ヒサノさんを囲んでのグループ学習 カウンセリング, 48(1), 21-22.
15. 龍門ヒサノ 2016 カール・ロジャーズに学んで—私のカウンセリング— カウンセリング, 48(1), 18-21.
16. 全日本カウンセリング協議会 2016 特集：第22回二級カウンセラー研修会 カウンセリング, 48(1), 1-50.
 理事長挨拶（石井要子）
 小講義：フォーカシング—体験過程のシステム—（兵頭孝子）
 《一級カウンセラー資格取得者によるミニ講演》私のカウンセリングの道（池谷信子）
 《二級カウンセラー資格取得者による体験発表》
 カール・ロジャーズに学んで（龍門ヒサノ）
 龍門ヒサノさんを囲んでのグループ学習（中村忠生）
 カール・ロジャーズに学んで（井上淑子）
 井上淑子さんを囲んでの小グループでの学び（藤木由理）
 カール・ロジャーズに学んで（永田富美子）
 永田富美子さんのグループの司会をして（川手泰子）
 講演：カウンセリングと法律問題（松田琢磨）

C. 学会発表

1. 31th International congress of Psychology 2016 New Trend of Person-Centered and Experiential Approach in Japan. 31th International congress of Psychology Program, 218.
 企画者（Itou, Y.）
 Basic encounter group in Japan and my own view on BEG.(Shimoda, M.)
 The research for Development for Focusing Manner Scale(FMS) and how to teach

Focusing and Focusing Attitudes in Japan(Fukumori, H.)

Emotion-Focusd Therapy(Yamaguchi, K. & Iwakabe, S.)

2. 北田朋子・白井祐浩 2016 十分に機能するセラピストへの歩み セラピスト・センタード・トレーニングとその後のプロセス 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 116-117.
3. 永野浩二 2016 パーソンセンタード・カウンセリングに関する一考察—よくわからないケースと「共にいること」— 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 106-107.
4. 日本人間性心理学会（第35回大会）2016 自主企画：初心者セラピストのための体験合宿の試み—出店合宿を体験しよう— 日本人間性心理学会第35回大会 プログラム・発表論文集, 154-155.
企画者（矢野キエ）
話題提供者（三村尚彦・岡村心平・矢野キエ）
5. 日本心理臨床学会（第35回大会）2016 自主シンポジウム：PCA（Person-Centered-Approach）、その教育・訓練と継承を考える 日本心理臨床学会第35回秋季大会発表論文集, 108
企画者（飯長喜一郎）
司会者（飯長喜一郎）
話題提供者（小林孝雄・三國牧子・伊藤研一）
指定討論者（園田雅代）
6. 住沢佳子 2016 人型シールPSSによる自己理解の促進2—来談者中心カウンセリングの立場から— 日本カウンセリング学会第49回大会プログラム, 38.

D. 翻訳

〔該当文献なし〕

E. 海外文献紹介

1. 中田行重 2016 古典的クライエント中心学派（Classical Client-Centered Therapy）がGendlinを認めない論理から学ぶ—Brodley（1991）の紹介と考察— 関西大学臨床心理専門職大学院心理臨床センター「関西大学心理臨床センター紀要」, 7, 131-140.
2. 中田行重・小野真由子・構 美穂・中野紗樹・並木崇浩・本田孝彰 2016 パーソン・センタード・アプローチにおけるスーパービジョンの基本的考え方—Lambers（2013）の紹介— 関西大学臨床心理専門職大学院 心理臨床センター「関西大学心理臨床センター紀要」, 7, 121-130.

F. 書評

〔該当文献なし〕

A. 書籍

1. 岩壁 茂 2013 ヒューマニスティックアプローチ①—学問の発展とそれを支えた研究者たち— 岩壁 茂・福島哲夫・伊藤絵美「臨床心理学入門—多様なアプローチを越境する—」有斐閣, 第5章, 113-130.
2. 岩壁 茂 2013 ヒューマニスティックアプローチ②—臨床の実際— 岩壁 茂・福島哲夫・伊藤絵美「臨床心理学入門—多様なアプローチを越境する—」有斐閣, 第6章, 131-152.
3. 人間中心の教育研究会大阪事務局編 2015 記念文集 私と畠瀬稔 人間中心の教育研究会大阪事務局

略歴

34のメッセージ

畠瀬先生の思い出（石森大介）

ありし日の畠瀬稔先生のこと（伊藤義美）

畠瀬 稔先生とのご縁（岩村 聡）

羅針盤としての畠瀬稔先生（大島利伸）

畠瀬 稔先生の思い出（小川 淳）

「琵琶湖畔プログラム」の思い出（尾崎かほる）

1984年夏 大学4回生教員採用試験受験勉強中（小幡浩次）

ずっと支えていただきました（小泉周二）

畠瀬 稔先生との思い出（坂中正義）

私のとしての「畠瀬 稔先生経験」（佐味秀雄）

畠瀬 稔先生を想う（庄田節子）

私のなかの「畠瀬 稔」先生（田中嘉明）

畠瀬 稔先生から手渡されたもの（塚本久夫）

畠瀬先生ありがとうございます（中山正暢）

わが谷は緑なりき（永原伸彦）

畠瀬先生 ありがとう さようなら（南河恭子）

畠瀬先生（はたちちゃん）の思い出（新村信貴）

畠瀬先生と出会って（野田 諭）

畠瀬先生にいただいたもの（野近和夫）

畠瀬稔先生への感謝と「私たち」の今（東口千津子）

民主主義の伝道師 畠瀬稔先生（平野信喜）

畠瀬稔先生の思い出（広瀬寛子）

故 畠瀬 稔先生を偲ぶ（増田 實）

畠瀬先生の思い出（松本 剛）

ありのままであること、歩き続けること、対等であること（水野行範）

在りし日の有馬研修会における畠瀬稔先生（村田 進）

先ずご報告（八尾芳樹）

畠瀬先生の予言「きっと変わってゆかれますよ。」（八木美佳）

畠瀬先生の思い出（ダリル・ヤギ）

畠瀬先生へ深く感謝します（山内常博）

大切なこと（渡辺 昭）

父・畠瀬稔の趣味について（畠瀬和志）

父・畠瀬稔の思い出（畠瀬頼子）

長い間ささえていただいていたありがとうございました（畠瀬直子）

レポート

KNCレポート発刊にあたって

Person-Centered Approachにおけるスーパーヴィジョン～ヴァイジー2

人よりの聞き取りを中心に～

「人間中心の教育研究会について」

人間中心の教育とエンカウンター・グループ～カール・ロジャーズの

講座体験より～

あとがき

B. 研究論文

1. 河崎俊博 2015 リフレクションという応答の意義から観た傾聴の諸側面
心理臨床学研究, 33(5), 508-518.
2. 村山正治 2015 私がこの学会会員として大切に感じていること— 名誉会員
として大切に感じていること— 日本人間性心理学会ニュースレター, 85, 4.
3. 押江 隆 2015 パーソン・センタード・アプローチとスーパービジョン 山
口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター紀要 6, 27-34.
4. 押江 隆 2015 地に足をつけて生きる 日本人間性心理学会ニュースレター,
85, 5.
5. 白井祐浩・北田朋子・樋渡孝徳 2013 セラピスト・センタード・トレーニン
グの意義—「正しい臨床」から「私の臨床」へ— 志學館大学大学院心理臨
床学研究科紀要, 7, 3-11.
6. 白井祐浩・湯田翔悟 2014 セラピストにおける歴史性についての一考察 セ
ラピスト・センタード・トレーニングを通して— 志學館大学大学院心理臨
床学研究科紀要, 8, 3-7.

C. 学会発表

〔該当文献なし〕

D. 翻訳

〔該当文献なし〕

E. 海外文献紹介

1. 日本人間性心理学会事務局 2015 Mikuni, M(ed) 2015 The Person-Centered Approach in Japan: Blending a Western Approach with Japanese Culture, PCCS Books. 日本人間性心理学会ニュースレター, 85, 6.

F. 書評

1. 日本人間性心理学会事務局 2015「村山正治・飯長喜一郎・野島一彦監修 本山智敬・坂中正義・三國牧子編 2015『ロジャーズの中核三条件 カウンセリングの本質を考える（全3巻）』創元社」日本人間性心理学会ニュースレター, 85, 6.

第Ⅱ部：ベーシック・エンカウンター・グループ

「第Ⅱ部：ベーシック・エンカウンター・グループ」には関連文献のうち、ベーシック・エンカウンター・グループ、パーソン・センタード・アプローチなどの来談者中心のオリエンテーションにもとづくグループ・アプローチ、「ファシリテーター」「グループ・プロセス」などの基礎概念、歴史、人物等が論じられているものを収録した²。

2016年の概要は次のとおりである。「A.書籍」はなかった。「B.研究論文」は4本であった。「C.学会発表」は16本で、そのうち2つがシンポジウムであった。「D.翻訳」はなかった。「E.海外文献紹介」はなかった。「F.書評」はなかった。

2016年における「ベーシック・エンカウンター・グループ」の特徴は、エンカウンター・グループにおけるファシリテーター養成について論じたB-2、B-3が刊行されたことであろう。

B-2は、関西人間関係研究センターでのファシリテーター研修について、B-3は、臨床心理士養成の文脈での大学院教育におけるファシリテーター養成について、その実践と特徴がまとめられている。次世代養成はこのオリエンテーションの発展のために必要不可欠な課題である。特にグループ・アプローチはパーソンセンタード・アプローチの拡がりを支える重要な実践領域であるが、文献数の推移をみるとやや活性化のための方策が必要な状況ともいえる。これらの文献がその契機となる事が望まれよう。

なお、2016年は「人間性心理学研究」に4本（B-1～4）、関連文献が掲載されている。

² なお、体験過程療法に特化したグループ・カウンセリングは、第Ⅲ部へ収録されている。

A. 書籍

〔該当文献なし〕

B. 研究論文

1. 金子周平 2016 人間性心理学におけるグループ実践家のトレーニング—序論— 人間性心理学研究, 34(1), 73-79.
2. 松本 剛 2016 ベーシック・エンカウンター・グループのファシリテーター研修 人間性心理学研究, 34(1), 95-101.
3. 野島一彦 2016 大学院教育におけるエンカウンター・グループのファシリテーター養成 人間性心理学研究, 34(1), 81-84.
4. 下田節夫 2016 グループから学んで—ベーシック・エンカウンター・グループで起きることとスタッフのあり方について— 人間性心理学研究, 34(1), 109-120.

C. 学会発表

1. 相原 誠・木村太一・森川友子 2016 教育現場におけるPCAGのファシリテーションに関する一考察 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 58-59.
2. 池ノ谷 和 2016 ベーシック・エンカウンター・グループ体験の報告と考察 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 72-73.
3. 今井美穂 2016 二つのベーシック・エンカウンター・グループの体験報告と考察 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 34-35.
4. 姜 潤華 2016 乳幼児をもつ母親支援グループの探索的研究—PCAG仮説に基づく— 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 118-119.
5. 菊川紗希 2016 ベーシック・エンカウンター・グループ参加体験報告—心の変容と考察— 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 84-85.
6. 清澤亜希子 2016 日本におけるエンカウンター・グループ観の多様性について 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 140.
7. 前田春菜・相澤亮雄・村山正治 2016 入学初期に実施したPCAGの看護教員ファシリテーター体験の分析—半構造化面接による— 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 124-125.
8. 三浦直樹 2016 専修学校の授業におけるエンカウンターグループのセッションの構成 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 86-87.
9. 水野行範 2016 二つのベーシック・エンカウンター・グループの体験報告と考察 日本人間性心理学会第35回大会
10. 村久保雅孝 2016 ベーシック・エンカウンター・グループ研究におけるナ

- ラティブ・アプローチの可能性2 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 88-89.
11. 日本心理臨床学会（第35回大会）2016 自主シンポジウム：エンカウンター・グループを主催する意味・目的・姿勢を巡って 日本心理臨床学会第35回秋季大会発表論文集, 116.
- 企画者（下田節夫）
司会者（岡村達也）
話題提供者（下田節夫・高橋紀子・中田行重・松本 剛）
指定討論者（野島一彦）
12. 日本人間性心理学会（第35回大会）2016 自主企画：「グループ研究会」の活動について—そのこれまでとこれから— 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 164-165.
- 企画者（下田節夫）
話題提唱者（野島一彦・岡村達也・橋紀子・下田節夫）
指定討論者（松本 剛・吉村真奈美）
司会者（高橋紀子）
13. 大築明生 2016 夢をテーマとしたエンカウンター・グループ 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 122-123.
14. Shimoda, M. 2016 Basic encounter group in Japan and my own view on BEG. 31th International congress of Psychology Program, 244.
15. 高松 里・平井達也・井内かおる・村久保雅孝・都能美智代・吉川麻衣子 2016 エンカウンター・グループが目指すものは何か? —「スロー・エンカウンター・グループin沖縄」のスタッフが求めたもの— 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 104-105.
16. 柘植順子・石田妙美 2016 エンカウンターグループ体験直後の感想から見た継続の可能性を探る 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 139.

D. 翻訳

〔該当文献なし〕

E. 海外文献紹介

〔該当文献なし〕

F. 書評

〔該当文献なし〕

付：同リスト（～2015）

「第Ⅱ部：ベーシック・エンカウンター・グループ」の追録

A. 書籍

〔該当文献なし〕

B. 研究論文

1. 荒井美音里 2014 ベーシック・エンカウンター・グループ体験の報告と考察 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 11, 71-77.
2. 池ノ谷 和 2015 ベーシック・エンカウンター・グループ体験の報告と考察 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 12, 95-104.
3. 今井美穂 2015 二つの「ベーシック・エンカウンター・グループ」体験：その報告と考察 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 12, 105-116.
4. 伊藤義美 2015 カウンセリング体験学習の短期研修型—エンカウンター・グループの実証的研究— 人間環境大学「人間と環境」, 6, 1-7.
5. 伊藤義美 2015 通い研修型の短期エンカウンター・グループの実証的研究 人間環境大学「人間と環境」, 10, 29-37.
6. 野島一彦 2015 心理ミーティングとエンカウンター・グループの比較検討 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 12, 25-28.
7. 押江 隆・加藤寛子・水戸部準・大濱知佳・大塚聡介・大津久美・上田佳苗・大山 薫・堺屋悠紀 2014 大学院の講義におけるエンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み（第2報） 山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター紀要, 5, 17-26.
8. 押江 隆・小黑明日香・稲田一善 2014 定時制高校におけるエンカウンター・グループの事例報告—PCAグループ, コミュニティ臨床の視点から— 学校メンタルヘルス, 17(2), 182-191.
9. 鈴木研司・平山栄治 2011 沈黙の現象学に関する覚書：エンカウンター・グループ体験を通して 青山心理学研究, 11, 63-72.
10. 鈴木研司・平山栄治 2015 エンカウンター・グループにおいて心理的成長がもたらされるメカニズムについて—高成長者と低成長者の個人過程の比較から— 心理臨床学研究, 33(5), 462-472.
11. 谷澤祐子・野部晶代・勅使河原由季・野島一彦 2014 大学の授業における半構成的エンカウンター・グループの事例研究 跡見学園女子大学文学部臨床心理学科紀要, 2, 65-75.
12. 筒井優介 2015 PCAグループにおける夢解釈の実際と意義 日本人間性心理学会第34回大会プログラム・発表論文集, 44-45.
13. 吉川麻衣子 2015 非行少年等の心理教育的支援を目的としたエンカウンターグループ実践：グループ・プロセスと少年の参加体験の分析を中心に

C. 学会発表

1. 荒井美音里 2015 ベーシック・エンカウンター・グループ体験の報告と考察 日本人間性心理学会第34回大会プログラム・発表論文集, 62-63.
2. 張 彩虹・友納艶花 2015 日本人学生と中国人留学生の半構成型エンカウンター・グループの事例検討—文化的自己観に着目して— 日本人間性心理学会第34回大会プログラム・発表論文集, 147.
3. 森本文子 2015 大学院1年生を対象とした継続型エンカウンター・グループの試み 日本人間性心理学会第34回大会プログラム・発表論文集, 110-111.
4. 村久保雅孝 2015 ベーシック・エンカウンター・グループ研究におけるナラティブ・アプローチの可能性 日本人間性心理学会第34回大会プログラム・発表論文集, 74-75.
5. 小黒明日香・稲田一善・押江 隆 2013 定時制高校におけるPCAグループの実践的研究(II)—グループ実施以前の要因の検討 日本学校メンタルヘルス学会第16回大会
6. 押江 隆・小黒明日香・稲田一善 2013 定時制高校におけるPCAグループの実践的研究(I)—PCAグループの効果とそれをもたらした要因の検討— 日本学校メンタルヘルス学会第16回大会
7. 杉浦崇仁・木村太一他 2015 PCAグループにおけるC.R.Rogersの3条件の変化についての考察 日本人間性心理学会第34回大会プログラム・発表論文集, 124-125.

D. 翻訳

〔該当文献なし〕

E. 海外文献紹介

〔該当文献なし〕

F. 書評

〔該当文献なし〕

第Ⅲ部：体験過程療法・フォーカシング

「第Ⅲ部：体験過程療法・フォーカシング」には関連文献のうち、体験過程療法やフォーカシング、フォーカシング指向心理療法、「体験過程」「フェルトセンス」「シフト」などの基礎概念、歴史、人物等が論じられているものを収録した。

2016年の概要は次のとおりである。「A.書籍」は2本で、いずれも単行本であっ

た。「B.研究論文」は52本であった。「C.学会発表」は19本で、そのうち5つがシンポジウムであった。「D.翻訳」は6本で、そのうち2本が単行本であった。「E.海外文献紹介」はなかった。「F.書評」は8本であった。

2016年における「体験過程療法・フォーカシング」の特徴は、フォーカシングの視点から心理臨床をとらえなおしたA-2、翻訳であるD-1、D-2が刊行されたことであろう。

A-2は、単なるフォーカシングの概説書ではなく、心理臨床、特に傾聴について、フォーカシングの知見からのフィードバックが語られており、興味深い。おそらく、傾聴の精緻化の1つの方向性がここにあり、今後の展開も期待される。

D-1は、東洋的な瞑想法をとりいれたフォーカシングの概説書である。D-2は読者にワークショップに参加しているような体験をもたらす独特の構成で、ワーク集の側面もある書籍である。どちらも、翻訳者の著者に対する信頼感が高く、そこが刊行のモチベーションとなっているようである。フォーカシングに関する翻訳書はコンスタントに刊行されているが、バリエーションの充実が最近の特徴といえよう。

なお、2016年は「心理臨床学研究」に1本（B-6）、関連文献が掲載されている。また、「体験過程療法・フォーカシング」の文献は、日本フォーカシング協会ニューズレター「The Focuser's Focus」にコンスタントに発表されている。

A. 書籍

1. 近田輝行監修 前田満寿美・伊藤三枝子 2016 ハンドブック インタラクティブ・フォーカシングーからだに根ざした深いコミュニケーションを学ぶ～傾聴・共感・癒し～ インタラクティブ・フォーカシング学習会
監修者より
はじめに
第1章 インタラクティブ・フォーカシングの解説
第2章 インタラクティブ・フォーカシングの実践
2. 池見 陽編 2016 傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシングー感じる・話す・聴くの基本ー ナカニシヤ出版
第1章 古典的な心理療法理論（池見 陽・河崎俊博）
第2章 感じるとは如何にあるのか（池見 陽・河崎俊博）
第3章 「感じ」を話すとき何が起ころのか（田中秀男・岡村心平・三宅麻希）
第4章 セラピストが聴くとき何が起ころのか（池見 陽）
第5章 アップデートする傾聴とフォーカシング（池見 陽）
第6章 更新し続けるフォーカシング諸方法（池見 陽・河崎俊博・田中秀男・岡村心平・筒井優介・矢野キエ・平野智子・青木 剛）

B. 研究論文

1. 2016つどい準備委員会編 2016 2016年度 年次大会～福島・いわきにつどう～第二報 The Focuser's Focus, 19(1), 3-9.
2. 秋元紳司 2016 「コミュニティ・ウェルネス・フォーカシング・ワークショップ in 京都 Part II」に参加して The Focuser's Focus, 18(4), 12-13.
3. 秋元紳司 2016 いわきで過ごした2日間 The Focuser's Focus, 19(3), 10.
4. 渥美美穂子 2016 コミュニティと私（個） The Focuser's Focus, 18(4), 12.
5. 伊達山裕子 2016 こころの日記 The Focuser's Focus, 19(3), 20-21.
6. 藤掛友希 2016 コラージュ作品制作と作品に対するPAC分析の適用が体験過程に及ぼす影響 心理臨床学研究, 34(1), 39-50.
7. 浜田千晴 2016 インタラクティブ・フォーカシング（以下IF）レベル2ワークショップに参加して The Focuser's Focus, 18(4), 10.
8. 兵頭孝子 2016 小講義：フォーカシング―体験過程のシステム― カウンセリング, 48(1), 4-12.
9. 市川洋子 2016 2016ケンブリッジ国際会議に参加して The Focuser's Focus, 19(3), 15.
10. 池見 陽・李明・王 曉芳 2016 逆さまの帽子～意味はどのように創造されるのか～ The Focuser's Focus, 19(1), 10-13.
11. 池見 陽 2016 アジア・フォーカシング国際会議（AFIC）へのいざない The Focuser's Focus, 19(3), 2-5.
12. 伊藤三枝子 2016 インタラクティブ・フォーカシング・レベル1ワークショップの報告 The Focuser's Focus, 19(2), 12.
13. 河原 円 2016 2016ケンブリッジ国際会議に参加して The Focuser's Focus, 19(3), 15.
14. 河崎俊博 2016 中国におけるフォーカシングの態度に関する数量的研究 関西大学臨床心理専門職大学院紀要「サイコロジスト」, 6, 29-37.
15. 古賀恵子 2016 「コミュニティ・ウェルネス・フォーカシング・ワークショップ in 京都 Part II」に参加して The Focuser's Focus, 18(4), 13.
16. 小泉隆平 2016 2016ケンブリッジ国際会議に参加して The Focuser's Focus, 19(3), 14-15.
17. 小坂淑子 2016 インタラクティブ・フォーカシングWS感想 The Focuser's Focus, 19(2), 13.
18. 古谷英子 2016 感じること？ The Focuser's Focus, 19(2), 10-11.
19. 久羽 康 2016 インタラクティブ・レベル2のワークショップに参加して The Focuser's Focus, 18(4), 9-10.
20. 楠木戀都 2016 2016ケンブリッジ国際会議に参加して The Focuser's Focus, 19(3), 16.
21. 川中淳子 2016 FISS2016に参加して The Focuser's Focus, 19(3), 18.

22. 前田満寿美 2016 インタラクティブ・フォーカシング・ワークショップ・レベル2の報告 The Focuser's Focus, 18(4), 8-9.
23. 松田清四朗 2016 連載企画 超びっとフォーカシング：スペースとフェルトセンスと慈悲 The Focuser's Focus, 19(1), 17.
24. 湊 太智 2016 ワークショップに参加して The Focuser's Focus, 19(2), 11.
25. 宮下武二郎 2016 3.11後のいわきに想う The Focuser's Focus, 19(3), 6-7.
26. 長谷賢一 2016 超びっとフォーカシング：比喩と交差で遊ぶ～「言葉の種さがし」～ The Focuser's Focus, 19(2), 15.
27. 仁田公子 2016 超びっとフォーカシング～学校に「ホッとしたひととき」を～ The Focuser's Focus, 18(4), 11.
28. 野元剛二 2016 南の島のフォーカシング The Focuser's Focus, 19(2), 11-12.
29. 野村昌世 2016 ミニミニ実践報告：たばことわたしとフォーカシング The Focuser's Focus, 19(1), 17-18.
30. 大田民雄 2016 フォーカシングによって確実に体験すること The Focuser's Focus, 19(1), 13-14.
31. 大田民雄 2016 生き方としてのフォーカシング The Focuser's Focus, 19(3), 18-19.
32. 流 一世 2016 超びっとフォーカシング：聴覚障がいを持つ子どもへのフォーカシング The Focuser's Focus, 19(3), 22.
33. 齋藤英俊 2016 「子どもとフォーカシングの基本」に参加して The Focuser's Focus, 19(3), 14.
34. 酒井久実代 2016 マイブレスヤスタイム The Focuser's Focus, 19(2), 13.
35. 酒井久実代 2016 2016ケンブリッジ国際会議に参加して The Focuser's Focus, 19(3), 15-16.
36. 坂下英淑 2016 インタラクティブ・フォーカシング・レベル1に参加して The Focuser's Focus, 19(2), 13-14.
37. 笹田・古澤・小山・長嶋・伊達山 2016 2016年集い JCFA出店「子どもとフォーカシングの基本」～子どもと接するときに気を付けたいこと～ The Focuser's Focus, 19(3), 13.
38. 澁谷奈加子 2016 わたしは「子どもとフォーカシング」実践 The Focuser's Focus, 19(1), 16.
39. 新村信貴 2016 JCFAWS感想 The Focuser's Focus, 19(2), 10.
40. 杉浦喜代子 2016 TAE風（ふう）「気まぐれ日記」に参加して The Focuser's Focus, 19(3), 10-11.
41. 高瀬健一 2016 理論セミナーでの体験とその後 The Focuser's Focus, 19(2), 14-15.
42. 滝川道子 2016 インタラクティブ・フォーカシング・レベル2に参加して

- The Focuser's Focus, 18(4), 9.
43. 玉澤秀寿 2016 2度目のレベル2ワークショップ The Focuser's Focus, 18(4), 10-11.
 44. 田村恵子・千木良暁司 2016 TAEで和菓子づくり The Focuser's Focus, 19(3), 19.
 45. 田中久美子 2016 2016ケンブリッジ国際会議に参加して The Focuser's Focus, 19(3), 16.
 46. 勅使河原真弓 2016 子どものフォーカシングのまなび The Focuser's Focus, 18(4), 8.
 47. 富田 新 2016 フォーカサーの集いに参加して The Focuser's Focus, 19(3), 10.
 48. 山本美保 2016 コミュニティ・ウェルネス・フォーカシング・ワークショップ in 京都 Part II The Focuser's Focus, 18(4), 11-12.
 49. 山本恵美 2016 フォーカサーの集いに参加して The Focuser's Focus, 19(3), 9-10.
 50. 山本美保 2016 インターナショナル・フォーカシング・インスティテュートサマースクール（2016年8月21～27日）のご報告 The Focuser's Focus, 19(3), 17-18.
 51. 山崎 暁 2016 奨励賞 受賞インタビュー 日本人間性心理学会ニュースレター, 87, 7.
 52. 吉田 言 2016 時が止まったような The Focuser's Focus, 19(3), 11.

C. 学会発表

1. 藤元慎太郎 2016 青年期における過剰適応とフォーカシング的態度との関連 日本心理臨床学会第35回秋季大会プログラム, 77.
2. 池見 陽 2016 頻繁に見過ごされる体験過程基礎論 追体験・交差と意味・暗在の創造 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 100-101.
3. 石倉 篤 2016 Tグループにおけるやりとりと体験過程の進展との相互作用 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 42-43.
4. 春日菜穂美 2016 PTSDに対する描画を用いたアート・フォーカシングの効果 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 108-109.
5. 三木健郎 2016 第12回 子どもとフォーカシング in 京都の開催を終えて The Focuser's Focus, 19(2), 10.
6. 森川友子・岩崎万里 2016 慢性疼痛の痛みに対処できる感じを得るまで 描画が有効であったフォーカシングの一事例 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 114-115.
7. 村田 進 2016 「燈台へ」創作体験における中心過程について—A研修会で

- のB氏の心理的成長— 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 50-51.
8. 日本心理臨床学会（第35回大会）2016 自主シンポジウム：「こころの天気」描画法の臨床的活用の可能性(3)—活用効果の検証— 日本心理臨床学会第35回秋季大会発表論文集, 115.
企画者（土江正司・足立智昭）
司会者（土江正司）
話題提供者（足立智昭・奥井智一郎・上蘭俊和・大迫久美恵）
指定討論者（野元剛二）
9. 日本人間性心理学会（第35回大会）2016 自主企画：からだのレベルから見た「話を聴く」ということ—世に働く全ての人々に心理学者は何ができるか、楽しみながら模索するためのレッスン— 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 151.
企画者（春日作太郎）
コメンター（村山正治・村久保雅孝）
10. 日本人間性心理学会（第35回大会）2016 自主企画：体験が推進される言葉の創造について ジェンドリン哲学より 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 160-161.
企画者（矢野キエ）
話題提供者（三村尚彦・岡村心平・矢野キエ）
11. 日本人間性心理学会（第35回大会）2016 自主企画：フォーカシング初心者へのガイドに役立つこと 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 160-161.
企画者（小坂淑子）
話題提供者（榊原佐和子・小坂淑子）
12. 日本人間性心理学会（第35回大会）2016 自主企画：フォーカシング指向心理療法における見立ての位置づけ 他学派との共営を目指したモデル 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 162-163.
企画・司会者（内田利広・平野智子）
話題提供者（河 俊博・日野唯香・小泉隆平・青木 剛）
指定討論者（内田利広）
13. 押江 隆 2016 挫折体験の意味づけとフォーカシング的経験および外傷後成長との関連の検討 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 102-103.
14. 酒井久実代・河崎俊博・池見 陽 2016 フェルトセンスの象徴化を含めた体験過程尊重尺度と精神的健康との関連 性の検討 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 135.
15. 舍川優悟 2016 フェルトシフト時に生じる主観的变化の体験分類について

- の探索的研究 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 133.
16. 高橋寛子 2016 TAEを用いた体験の言語化とその意義 大学院生の病院 実習体験の深まりと構造化 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 82-83.
17. 高橋康子・小野貴美子・石川須美子 2016 フォーカシング的態度と共感性がいじめ第三者に与える影響 日本心理臨床学会第35回秋季大会プログラム, 93.
18. 山崎 暁 2016 精神科領域におけるフォーカシング指向心理療法 日本心理臨床学会第35回秋季大会プログラム, 27.
19. 矢野キエ 2016 気づきが生まれるところに働いていること—コラージュワークの体験より— 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 48-49.

D. 翻訳

1. デヴィッド・I・ローム著（日笠摩子、高瀬健一訳）2016 マインドフル・フォーカシング—身体は答えを知っている— 創元社
- はじめに
- 第1部 自分の中に友だちを作る
- 第1章 フェルトセンスを見つけるためのステップ
- 第2章 フェルトセンスへの入り口
- 第3章 気持ちの下の気持ち
- 第4章 フェルトセンスを育む
- 第5章 状況に取り組む
- 第6章 フェルトセンスに焦点を合わせる
- 第7章 フェルトセンスからの洞察を求める
- 第8章 小さな一歩とフェルトシフト、そして出てきたものを味わうこと
- 第9章 自己への共感を育み、内なる批判家を和らげる
- 第10章 マインドフルネスと気づきと主たる自己
- 第11章 生命プロセスの深い本質
- 第2部 人生を前に進める
- 第12章 洞察から行動ステップへ
- 第13章 深い傾聴
- 第14章 葛藤
- 第15章 難しい決断をする
- 第16章 理解する
- 第17章 「最初の考えが最もよい考え」：創造のプロセスにおけるフェルトセンス
- 第18章 空間を拓ける

第19章 観想：それ以上を感じる

付録 マインドフル・フォーカシングの手順

さらなる学びと実践のための情報

おわりに

2. Simon, B.H. & Zubizarreta, R.Z.(Eds.) 2014 Discovering The Gift of Your Inner Wisdom : How I Teach Focusing. (日笠摩子監訳榊原佐和子・小坂淑子・高瀬健一・堀尾直美訳 2016 フォーカシングの心得—内なる知恵の発見法— 創元社)

第1部 最初の三日間ワークショップ

第1章 愛の実習

第2章 安全を保つ

第3章 フェルトセンスに気づくためのワークをもう少し

第4章 リスニングに進む

第5章 二日目を始める

第6章 練習を深める

第7章 参加者が自主的に練習できるような準備

第2部 二回目の三日間ワークショップ

第8章 積極的な参加を促す

第9章 ガイドの仕方の教え方

第10章 他の教師との協働

第11章 インタラクティブ・フォーカシングの教え方

第12章 意志決定の実習

第3部 フォーカシングの学びを助けることについてもう少し

第13章 困難にぶつかったときの取り組み方

第14章 上級ワークショップとチェンジズ・グループと実践グループ

第4部 ビビ・サイモン著作集

3. Conell, A.W. (桜井多恵子・大澤美枝子訳) 2016 アン・ワイザー・コーネルのWeekly Tips (ウィークリー・チップス) のご紹介 The Focuser's Focus, 19(1), 19-20.
4. Corsetti, N. & Pasquini, O. (川崎直樹訳) 2016 世界のフォーカシング (9) イタリアにおけるフォーカシングの歴史と発展 The Focuser's Focus, 19(1), 16-17.
5. Blake, B. (河原 円訳) 2016 世界のフォーカシング (10) エルサルバドルのフォーカシング The Focuser's Focus, 19(1), 23-24.
6. Willman, A. & Lawrence, N. J. (流 一世訳) 2016 シリーズ：世界のフォーカシング (8) アメリカ北西部におけるフォーカシング・コミュニティの歴史 The Focuser's Focus, 18(4), 14-15.

E. 海外文献紹介

〔該当文献なし〕

F. 書評

1. 池見 陽 2016 「デヴィッド・I・ローム著（日笠摩子、高瀬健一訳）2016『マインドフル・フォーカシング—身体は答えを知っている—』創元社」 The Focuser's Focus, 19(2), 7-8.
2. 日笠摩子 2016 「Simon, B.H. & Zubizarreta, R.Z.(Eds.) 2014（日笠摩子監訳）榊原佐和子・小坂淑子・高瀬健一・堀尾直美訳 2016『フォーカシングの心得—内なる知恵の発見法—』創元社」 日本人間性心理学会ニュースレター, 87, 8.
3. 岡村心平 2016 「池見 陽編 2016『傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング—感じる・話す・聴くの基本—』ナカニシヤ出版」 日本人間性心理学会ニュースレター, 87, 9.
4. 末武康弘 2016 「近田輝行監修前田満寿美・伊藤三枝子 2016『ハンドブック インタラクティブ・フォーカシング—からだに根ざした深いコミュニケーションを学ぶ—傾聴・共感・癒し—』インタラクティブ・フォーカシング学習会」 The Focuser's Focus, 19(3), 12.
5. 高瀬健一 2016 「デヴィッド・I・ローム著（日笠摩子、高瀬健一訳）2016『マインドフル・フォーカシング—身体は答えを知っている—』創元社」 日本人間性心理学会ニュースレター, 87, 8.
6. 田邊 裕 2016 「Simon, B.H. & Zubizarreta, R.Z.(Eds.) 2014（日笠摩子監訳）榊原佐和子・小坂淑子・高瀬健一・堀尾直美訳 2016『フォーカシングの心得—内なる知恵の発見法—』創元社」 The Focuser's Focus, 19(2), 8-9.
7. 田邊 裕 2016 「池見 陽編 2016『傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング—感じる・話す・聴くの基本—』ナカニシヤ出版」 The Focuser's Focus, 19(2), 9.
8. 上村英生 2016 「森川友子編 2015『フォーカシング健康法—こことからだが喜ぶ創作ワーク集—』誠信書房」 The Focuser's Focus, 18(4), 7.

付：同リスト（～2015）「第Ⅲ部：体験過程療法・フォーカシング」の追録

A. 書籍

〔該当文献なし〕

B. 研究論文

1. 青木 剛 2008 大学生における精神的健康に関する研究—フォーカシングの態度とレジリエンス、自己実現との関連から— 関西大学大学院修士論文

2. 青木 剛 2008 レジリエンス、自己実現から捉えた精神的健康とフォーカシング的態度との関連について 日本人間性心理学会第27回大会発表論文集, 134.
3. 青木 剛 2010 フォーカシングに関する数量的研究の国際動向をめぐって— 2009年フォーカシング国際会議シンポジウムでの発表から— 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要, 創刊号, 1-7.
4. 土井晶子・森永康子 2009 大学生における「フォーカシング的態度」と自己効力感、ソーシャルスキル、Locus of Controlの関連について 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 83.
5. 江田香織・中込四郎 2012 アスリートの自己形成における競技体験の内在化を促進する対話的競技体験 スポーツ心理学研究, 39(2), 111-127.
6. 藤高奈々 2013 日常におけるフォーカシング的態度と選択および親密性との関連 追手門学院大学心理学部2013年度卒業論文
7. 浜野 匠 2013 大学生のフォーカシング的態度と進路意思決定の困難さに関する調査 追手門学院大学心理学部2013年度卒業論文
8. 飯尾有未 2012 自己注目およびフォーカシング的態度と抑うつとの関連：コーピング方略からの検討を加えて 兵庫教育大学大学院修士論文
9. 生田祐介 2010 フォーカシングによるストレスマネジメント教育の展開 愛知教育大学修士論文
10. 河野達也 2011 フォーカシングの態度に関する研究—積極的および消極的態度の関連から— 追手門学院大学心理学研究科2010年度修士論文
11. 河崎俊博 2008 大学生におけるフォーカシング的態度と信頼感 関西大学卒業論文
12. 河崎俊博 2010 SEMIによるフォーカシング的態度の研究—FMS（体験過程尊重尺度）と信頼感— 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要, 創刊号, 29-27.
13. 河崎俊博 2013 体験過程促進的な応答を巡って—ReflectionとReflexive mode— 関西大学カウンセリングルーム紀要, 4, 29-35.
14. 三村理沙 2009 フォーカシングの態度と対処方略による特性不安への影響 関西大学卒業論文
15. 宮本真衣 2009 高校生におけるフォーカシング的態度の測定—大学生との比較— 関西大学卒業論文
16. 宮田周平 2001 フォーカシングの日常化が自己実現度に与える影響 青山学院大学心理臨床研究, 1, 89-94.
17. 宮武ゆかり 2009 キャリア意志決定に及ぼす諸要因の研究—社会的要因と個人的要因の関連から— 関西学院大学修士論文
18. 宮崎和也 2014 ひきこもり体験が及ぼす再構成に関する一考察—質問紙法とインタビュー調査より— 追手門学院大学大学院心理学研究科2013年度修

士論文

19. 森川友子・永野浩二・福盛英明・平井達也 2014 FMS (The Focusing Manner Scale) 改訂版の作成および信頼性と妥当性の検討 九州産業大学国際文化学部紀要, 58, 117-135.
20. 村澤香苗 2007 フォーカシング的態度尺度と臨床的妥当性についての検討 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 9(1/2), 65.
21. 永野浩二・福盛英明・森川友子・平井達也 2015 日常におけるフォーカシング的態度に関する文献リスト (1995-2014) 追手門学院大学心理学部紀要 9, 57-68.
22. 中垣美知代 2006 体験過程理論と交流分析からみた精神的健康について—体験過程尊重尺度 (FMS) と東大式エゴグラム (TEG) を用いて— 神戸女学院大学大学院人間科学研究科「ヒューマンサイエンス」, 9, 61-66.
23. 中垣美知代 2007 日常生活におけるフォーカシング的態度の研究～FMSとCMI、EQS、EXPとの関連— 神戸女学院大学大学院修士論文 (未公開)
24. 中谷隆子・杉江 征 2013 フォーカシングに関する心理学的研究の動向: 日常的フォーカシング態度への発展可能性 筑波大学心理学研究, 46, 121-129.
25. 押江 隆・水戸部準・大塚聡介 2015 「体験過程流箱庭療法」開発の試み 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 39, 109-118.
26. 斎藤恵子 2009 大学生における内的対象の想起とフォーカシング的態度の関連について 関西大学心理相談室紀要, 11, 49-56.
27. 澤野美香 2009 ストレス低減に関連する要因についての一考察—フォーカシングの態度とソーシャルサポート— 関西大学大学院修士論文
28. 澤野美香 2010 ストレス低減に関連する要因についての一考察—フォーカシングの態度とソーシャルサポート— 関西大学心理相談室紀要, 12, 27-36.
29. 植中祐至 2009 大学生におけるフォーカシングの態度の推移 関西大学卒業論文
30. 上西裕之 2010 日常生活におけるフォーカシングの態度と曖昧さへの態度の関連—FMS-Rと曖昧さへの態度尺度を用いての検討— 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要, 創刊号, 9-20.
31. 上西裕之 2010 日常生活におけるフォーカシングの態度とAlexithymia傾向との関連—FMS-RとTAS-20を用いて— 関西大学心理相談室紀要, 12, 57-64.
32. 上西裕之 2011 日常生活におけるフォーカシングに関する数量的研究 関西大学博士論文
33. 上西裕之 2011 日常生活におけるフォーカシングの経験についての一考察—フォーカシングの経験尺度の開発とその構造の分析— 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要, 2, 91-100.
34. 上西裕之 2012 日常生活におけるフォーカシングの経験と構造拘束度との関連 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要, 3, 65-73.

C. 学会発表

1. 鞠川由貴・山本優子・溝口英登・藤田洋子・植木美紀・森原 梓・渡邊弓子・多田佳歩・天野一城・押江 隆・小野史典 2015 フォーカシングにおけるフォーカサーおよびリスナーの不安傾向の変化の検討 九州心理学会第76回大会
2. 押江 隆・梅野智美 2015 「体験過程流箱庭療法」開発の試み(2)—セラピストが箱庭作品を味わう方法の検討— 日本人間性心理学会第34回大会プログラム

D. 翻訳

〔該当文献なし〕

E. 海外文献紹介

〔該当文献なし〕

F. 書評

〔該当文献なし〕

第Ⅳ部：その他

「第Ⅳ部：その他」には関連文献のうち、親子関係・家庭生活、教育・学習（学生中心の教授法や人間中心の教育など）等の来談者中心のオリエンテーションの広がりやその基礎概念、歴史、人物等、また、表現療法などのこれまでの3部には分類されないものを収録した。

2016年の概要は次のとおりである。「A.書籍」は1本で、単行本であった。「B.研究論文」は1本であった。「C.学会発表」は10本であった。そのうち2つがシンポジウムであった。「D.翻訳」はなかった。「E.海外文献紹介」は1本であった。「F.書評」はなかった。

2016年における「その他」の特徴は、質的研究法の概説書であるA-1が刊行されたことであろう。

TAEを軸とした質的研究に関する書籍は得丸さと子氏によるものがあるが、本書籍は質的研究全般を俯瞰的に取り扱っており、質的研究の広がりとともに、その中におけるTAEの位置づけも知ることができる良書である。質的研究の研究者へTAEをアピールすることもこの書籍に期待されることではなかろうか。

A. 書籍

1. 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之編著 2016「主観性を科学化する」質的研究法入門—TAEを中心に— 金子書房

はじめに (諸富祥彦)

第Ⅰ部 質的研究と「主観性の科学化」：質的研究の理論的基盤

1章 「主観性を科学化する」研究とは (末武康弘)

2章 質的研究の哲学的基礎について—こころの哲学と現象学は質的研究をどのように基礎づけることができるだろうか (村里忠之)

3章 主観性と一人称の科学—生きる身体とプロセスとしての知— (村川治彦)

第Ⅱ部 インタビュー分析における質的研究法—さまざまな質的研究法の理論と実際、研究事例—

4章 GTAの理論と実際 (小林孝雄)

5章 M-GTAの考え方と実際 (山崎浩司)

6章 ナラティブの理論と実際 (東海林麗香)

7章 複線径路等至性アプローチ—Trajectory and Equifinality Approach;TEA— (サトウタツヤ)

8章 IPAの理論と実際 (伊賀光屋)

9章 IPAの研究事例—死別にとまなう僧侶の悲嘆と成長に関する質的研究— (松下弓月)

10章 TAEの理論と実際 (得丸智子)

11章 TAEの研究事例—TAEステップによる内省プロセスの可視化の試み— (得丸智子)

12章 質的研究の諸方法の特徴—各方法論におけるアプローチの検討— (三好真人)

第Ⅲ部 TAEによる質的研究の実際

13章 心理・福祉分野における実践例 (高橋寛子・田中睦美・木村喜美代・末武康弘・青木桂子)

14章 教育・看護分野における実践例 (小林浩明・坂本喜代子・近藤朋子・上條純恵・田村真由美・末次典恵)

第Ⅳ部 資料

一人称科学の提唱 (E・ジェンドリン・ドン・ジョンソン著村里忠之訳)
質的研究の研究会ガイド

B. 研究論文

1. 並木崇浩・小野真由子 2016 PCAGIP法研究の動向と課題 関西大学臨床心理専門職大学院 心理臨床センター「関西大学心理臨床センター紀要」, 7, 91-100.

C. 学会発表

1. 小坂淑子 2016 KOL-BEを用いたフォーカシングプロセス—アートセラピー

- としての臨床適応可能性を探る— 日本心理臨床学会第35回秋季大会プログラム, 77.
2. 村山正治・浦野俊美・渡辺 隆 2016 5年間の播磨PCAGIPプロジェクトの軌跡 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 68-69.
 3. 中島真夕 2016 スクールカウンセラーが行うPCAGIP—工夫とその効果— 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 76-77.
 4. 日本人間性心理学会（第35回大会）2016 自主企画：仏法を基底にした人間中心のアプローチ—その体系についての一試案— 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 148-149.
企画・話題提供者（山本和夫）
 5. 日本人間性心理学会（第35回大会）2016 自主企画：アートを観る、語る場からの自己発見 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 150.
企画・話題提供者（津島和美）
 6. 小野京子 2016 パーソンセンタード表現アートセラピーにおける心理的成長—トレーニング参加者へのインタビュー調査— 日本心理臨床学会第35回秋季大会プログラム, 53.
 7. 押江 隆 2016 パーソンセンタード・コミュニティアプローチの実践と課題 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 30-31.
 8. 押江 隆・藤田洋子 2016 PCAGIP法にパーソンセンタード・スーパーヴィジョンを組み合わせた「リフレキシブPCAGIP法」の開発 日本心理臨床学会第35回秋季大会プログラム, 88.
 9. 中島真夕 2016 スクールカウンセラーが行うPCAGIP—工夫とその効果— 日本人間性心理学会第35回大会プログラム, 4.
 10. 山根倫也・押江 隆 2016 児童の教師に対する態度認知と学級集団形成および学校適応感の関連 ロジャーズの3条件態度の認知による検討 日本人間性心理学会第35回大会プログラム・発表論文集, 44-45.

D. 翻訳

〔該当文献なし〕

E. 海外文献紹介

1. 中田行重・清澤千紘・阪本久実子 2016 パーソン・センタード・アプローチにおける家族／カップル療法 関西大学臨床心理専門職大学院心理臨床センター「関西大学心理臨床センター紀要」, 7, 121-130.

F. 書評

〔該当文献なし〕

付：同リスト（～2015）「第Ⅳ部：その他」の追録

A. 書籍

〔該当文献なし〕

B. 研究論文

1. 押江 隆 2015 PCAGIP法による学校教員の事例検討会 山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター紀要, 5, 35.
2. 末武康弘 2015 多元的アプローチの醍醐味 学術通信, 岩崎学術出版社, 111, 5-7.
3. 山下和夫 2015 私の中の真宗とPCAとの交流 日本人間性心理学会ニュースレター, 85, 2.

C. 学会発表

1. 北田朋子・村山正治 2015 施設入居高齢者へのパーソンセンタードアプローチの導入と考察「音楽とおしゃべり」を用いて 日本人間性心理学会第34回大会プログラム・発表論文集, 66-67.
2. 望月洋介 2015 ファシリテーターが感情的に巻き込まれた状況でのPCAGIPのファシリテーション 日本人間性心理学会第34回大会プログラム・発表論文集, 86-87.
3. 村上恵子・北田朋子他 2015 大学院ケースカンファレンスにおけるPCAGIP法の試み—事例の提供・プロセス・結果・意義の考察— 日本人間性心理学会第34回大会プログラム・発表論文集, 82-83.

D. 翻訳

〔該当文献なし〕

E. 海外文献紹介

〔該当文献なし〕

F. 書評

1. 園田雅代 2015 「Cooper, M. & McLeod, J. (末武康弘・清水幹夫監訳) 2015 『心理臨床への多元的アプローチ—効果的なセラピーの目標・課題・方法—』 岩崎学術出版社」 臨床心理学, 16(5).

統計

2016年に発行された文献、及び追録された文献を先述の坂中（2004）に従い分類した。その結果を以前のデータと共にtableに示した。2016年に公開され

た関連文献は93篇（「来談者中心療法」18篇、「ベーシック・エンカウンター・グループ」4篇、「体験過程療法・フォーカシング」68篇、「その他」3篇）であった³。

よって、これまでに日本で公刊された関連文献は7690篇（「来談者中心療法」3453篇、「ベーシック・エンカウンター・グループ」1821篇、「体験過程療法・フォーカシング」2085篇、「その他」331篇）となった。

お願い

リストに収録した文献の記述上の誤りを見つけられた方、また、該当する文献を執筆された方、もれている文献を御存知の方は、筆者まで御連絡願えれば幸いである。

連絡先 〒466-8673 愛知県 名古屋市昭和区山里町18

南山大学 人文学部 坂中正義

E-mail:sakanaka@nanzan-u.ac.jp

Fax: 052-832-3110（ダイヤルイン）3955

³ 学会発表は合計に含まれていない。

Table 日本におけるバーンソンセンタード・アブローチに関する発行文献数 (2016.12.19現在)

	50-54	55-59	60-64	65-69	70-74	75-79	80-84	85-89	90-94	95-99	00-04	05-09	10-14	2015	2016	合計
来談者中心療法 (含：基礎概念) 遊戯療法も含む	2	7	13	35	14	15	13	9	20	15	8	14	4	5	0	174
書籍：単行本	3	5	9	27	47	43	48	20	111	118	53	35	44	1	0	564
書籍：章	0	0	0	1	2	9	19	15	3	11	13	15	8	8	1	105
論文：特集	0	5	91	68	67	114	149	229	186	316	347	277	242	40	15	2146
論文：一般	1	3	3	8	5	1	3	4	1	0	10	12	4	0	0	55
翻訳：単行本	0	0	41	106	3	6	8	7	6	13	59	1	6	1	0	257
翻訳：章	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	8	2	7	2	22
海外文献紹介	0	0	1	2	0	2	9	4	6	15	13	57	20	1	0	130
書評	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3	9	9	11	2	3	39
参考：発表：シンポ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3	9	9	11	2	39
参考：発表：一般	0	5	28	19	9	16	2	4	18	21	38	27	45	5	3	240
合計（学会発表は除く）	6	20	158	247	138	190	249	288	334	488	505	419	330	63	18	3453
ベシック・エンカウンター・グループ (含：グループカウンセリング)	0	1	0	1	0	1	2	1	4	3	2	4	5	1	0	25
書籍：単行本	0	0	1	1	4	19	16	15	30	29	14	4	10	1	0	144
書籍：章	0	0	0	0	0	3	0	1	8	1	4	2	0	1	0	20
論文：特集	0	0	3	0	37	121	247	206	283	155	216	142	111	36	4	1561
論文：一般	0	0	0	0	0	3	4	2	0	0	1	3	0	0	0	14
翻訳：単行本	0	0	0	0	0	1	2	0	1	2	4	4	0	0	0	14
翻訳：章	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2
海外文献紹介	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	2
書評	0	0	0	0	0	2	0	1	2	13	3	6	7	5	2	41
参考：発表：シンポ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1	3	6	6	1	23
参考：発表：一般	0	0	1	0	0	28	40	44	54	42	29	45	55	43	5	402
合計（学会発表は除く）	0	1	4	2	46	149	270	226	339	195	247	166	131	41	4	1821
体験過程療法 フォーカシング (含：体験過程の基礎概念)	0	0	0	1	0	0	2	0	2	8	6	8	5	1	2	35
書籍：単行本	0	0	0	0	2	5	4	5	17	37	18	7	29	0	0	124
書籍：章	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	5	21	2	0	0	32
論文：特集	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	5	21	2	0	0	32
論文：一般	0	0	0	0	1	24	65	98	130	190	398	359	334	57	52	1708
翻訳：単行本	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	5	8	3	0	2	26
翻訳：章	0	0	2	5	2	7	8	3	1	5	5	5	12	2	4	61
海外文献紹介	0	0	0	0	1	0	0	2	1	1	0	1	2	0	0	8
書評	0	0	0	1	0	1	0	5	6	16	21	13	16	4	8	91
参考：発表：シンポ	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	6	6	17	2	5	42
参考：発表：一般	0	0	0	0	0	5	11	28	41	44	60	139	108	4	14	495
合計（学会発表は除く）	0	0	2	7	6	37	80	115	158	265	458	422	403	64	68	2085
その他 (教育・経営など)	0	0	0	4	2	2	0	0	1	0	1	5	6	1	1	23
書籍：単行本	0	0	0	2	0	0	2	0	5	6	3	1	11	1	0	31
書籍：章	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	3
論文：特集	0	0	4	1	6	13	19	10	25	13	44	37	49	7	1	229
論文：一般	0	0	0	1	1	0	3	1	0	0	3	1	1	1	0	12
翻訳：単行本	0	0	0	4	1	0	1	0	1	0	9	0	1	0	0	17
翻訳：章	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
海外文献紹介	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	5	2	4	2	0	15
書評	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	6	0	2	11
参考：発表：シンポ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	6	0	8
参考：発表：一般	0	0	0	6	0	4	0	1	3	1	16	1	25	6	8	71
合計（学会発表は除く）	0	0	4	13	10	15	26	12	32	19	65	46	74	12	3	331
統計	6	21	168	269	200	391	625	641	863	967	1275	1053	938	180	93	7690

注）データは坂中による一連の「日本におけるバーンソンセンタード・アブローチに関する文献リスト」シリーズによった。